202406　口語詩句６月　　龍　秀美

＜総評＞
審査の方法が作者の自選から審査員の他薦になったことと、ひと月の投稿数に制限がかかったことにより、月々の総評に選ぶ作品に見落としが無いように気をつけています。誰にも固まって秀作ができる時期があるので、月評にも多めに掲載を心がけております。

馬鈴薯の芽を丁寧に削りとる
生きてく理由もさほどないのに
---
桜望子　山形県
――普遍的な動作と普遍的な心情のつながりの発見。

鉄琴の余韻のように春の雪
---
長谷川柊香　宮城県
――消えたと見えていつまでも空中に漂っているもの。かつてあって心に残っているもの。

本音だけ小さく丸めて祖母になる
---
まちりこ　埼玉県
――祖母とはそういうものだろう。

はなうたを紡ぐ
ことり
を
閉じ込めて
銀河 に 溺死 してしまおうか
---
さいう　石川県
――なんと可愛い。

どこへでもいける気がした
その「どこ」は
僕らの無知の明るいしるし

---
源楓香　東京都
――もし「どこ」がいつも決まっていたら、私たちは生きてなどいられない。

田園に細くたなびく灯の遠く
駅の機能のひとつだろうね
---
香取小春　宮崎県
――現代の「田舎」の夜の普遍的な風景が「駅の機能」という冷静な言葉で生きてくる。

逢わないことがふつうになって
ポプラ並木に影がある夜
---
Azusa　京都府
――恋が去って「ふつう」に気付くことの哀しさがくっきりと歌われている。

病院の匂いが嫌い 死の匂い
たまごボーロ グミ
コンロ カステラ
---
橋詰　桜京　東京都
――死が日常とほとんど境界が無いことを分からせてくれる。

まだ固い桃のもも色　約束を
おそれていないひとの目の色
---
羽水繭　大阪府
――前半と後半のフレーズが分かちがたく結びついている短歌のよろしさ。

つみあげた失敗で
ジェンガをしている
あなたが泣きやまないのに
　夜が、
---
雲理そら　大阪府
――夜はやさしい友だちか非情ないじめっ子か。

死ぬ時は、死にますと
叩く時は、叩きますと
そういってね、父さん母さん
---
池田　遥　福岡県
――言葉が単なる記号になるのは現代の恐怖のひとつかも知れない。

言の葉の端々に置く花束は
貴方のことを知りたい合図
---
金光　舞　埼玉県
――普遍的な愛の風景が美しい。

せう、をしょう、
そう読むように祖母のこと
ばあちゃんと呼び二人だけ夏
---
金光　舞　埼玉県
――言葉が越えてきた時間が優しさに変化する。

同棲初日素足でつくるオムライス
---
後藤　麻衣子　岐阜県
――状況が語りつくされている。

「雨が降っています」
二度言うラジオ沖縄忌
---
後藤　麻衣子　岐阜県
――意味以外の繰り返しに感情がこもることがある。

感情に飽きて火鉢の静けさよ
---
福山ろか　埼玉県
――火鉢という忘れることが許される装置は、日本の原風景かも知れない。

そうよ、母さんも長めに見積もる
---
牛田　悠貴　東京都
――「母さん」に寄り添うことで安らかな肯定が生まれる。

聞く
楽しい卑屈
懐かしいあなたの歪み
これは耳
聞けばよかった、そう思う
---
拾米　北海道
――耳を傾けるというのは許しの作業でしょう。